詩人と黒人兵士たち
Paul Laurence Dunbar の時代意識を探る

里内　克巳

19-20 世紀転換期に活躍したアフリカ系作家 Paul Laurence Dunbar は、アメリカ南部に奴隷制があった時代への懐旧に満ちた方言詩を書いたことで、生前に大きな人気を博したが、死後まもなく、彼の作風や取り上げる題材は時代遅れだと見られるようになった。しかし近年では、黒人ミンストレルとの繋がりを指摘されてきたダンバーの方言詩を、人種差別的なステレオタイプを間接的に覆そうとする試みとして評価する動きが出てきている。また、過去に素材を求めようとする彼の志向が、常に現実逃避に繋がるわけではない。南北戦争というアメリカ史において決定的な出来事を取り上げる際、ダンバーは合衆国の在り様やそのなかでの黒人の位置について、現実に即した鋭い考察を行なっている。南北戦争が絡んだ作品群は、アメリカの社会や歴史に寄せる彼の関心を端的に示してくれるのだが、本格的な論究の対象となることはほとんどない。そこで本発表では、南北戦争や黒人兵士といった主題を扱う際の、アメリカ社会の過去と現在に向ける書き手ダンバーの意識について考察する。

まず、“An Ante-Bellum Sermon”や “The Colored Soldiers”など、南北戦争とその前夜を背景にした初期の代表的な詩を検討することで、〈過去〉に目を向けつつ〈現在〉への視線も密かに組み込むダンバーの詩作の方法を確認する。“An Ante-Bellum Sermon”の語り手である黒人奴隷の説教師は、モーセによるイスラエルの民の解放を仲間たちに語る。ここに白人奴隷主に対する反抗の意図が込められていることは容易に想像がつくが、説教師自身は「わたしはまだ大昔のことについて説教しているのであって、今現在のことについて話しているのではない」と釈明する。踏み込んで読むならば、南北戦争前という〈過去〉を語る体裁のもとに、黒人たちがいまだ真のアメリカ市民として認知されない戦後の〈現在〉について語る、というダンバーの企図が窺える。ユーモアを含みつつも真摯なメッセージを秘めた方言詩であることが了解できる。

一方、“The Colored Soldiers”は、南北戦争で活躍した黒人兵士たちの勇敢さを高らかにうたいあげる詩である。ここでダンバーは、聖書でハムの末裔と位置付けられる黒人が軍人としての貢献によってアメリカ合衆国の正統な一員になったことを、‘Ham’と‘Uncle Sam’の押韻によって強調する。同様に、黒人たちが身に受けた ‘shame’から ‘fame’への転換も、鮮やかに表現する。語り手の関心が次第に〈過去〉から〈現在〉へと向かっていくこと、そして“An Ante-Bellum Sermon”と同様、世紀転換期におけるアメリカ黒人の立ち位置を考えるうえでのキーワードである ‘citizen’という語が使われることも重要である。

次に、詩作に盛られた時代意識の表われ方の変化という問題へと考察を進める。“The Colored Soldiers”は 1895 年の詩集 *Majors and Minors* に収められたが、その後ダンバーは 1903 年の詩集 *Lyrics of Love and Laughter* に “When Dey ’Listed Colored Soldiers”を収録している。この作品では、黒人男性が自発的に志願して国家のために敵と勇ましく戦う、というストーリーは強調されない。むしろ、敵も味方もなく兵士たちが無駄に命を散らすことへの嘆きに主眼が置かれている。その点でこの詩は、似たタイトルを持つ“The Colored Soldiers”をより醒めた視線で語り直した作品だと言える。

ダンバーが 20 世紀に入ってこうした戦争の悲惨さや無意味さを強調する作品を発表した背景として、依然として黒人を「市民」として認知しないばかりか、暴力によって抑圧しようとする社会への不信と苛立ちが彼のなかで高まっていたことが推察できる。ここで黒人兵士たちを扱った二つの詩のトーンの違いを、Frederick Douglass を素材とした二つの詩のトーンの違いと重ねて考えてみる。ダンバーは 1893 年にシカゴ万博の会場で最晩年のダグラスと出会い、彼の演説に続けて“Ode to the Colored American”と題する詩を朗読した。それが “The Colored Soldiers”とタイトルを代えて詩集に収められた、という経緯を考慮すると、詩のなかの勇敢な黒人兵士の姿に、黒人の地位向上のために長く奮闘し、しかも黒人が兵士として南軍と戦うことを奨励したダグラスその人の姿を読み込むことも不可能ではない。その点で“The Colored Soldiers”は、この高名な政治家の死去の報を受けて書かれた追悼詩 “Frederick Douglass”との繋がりを持つ。

この追悼詩では、1 人称複数の〈私たち〉がダグラスの死後もその遺志を継ぎ、アメリカにおける人種的平等への戦いを続ける決意を力強く表明する。こうした未来に向けた強い意志は、1903 年の詩“Douglass”での、拠り所を失くして為す術を持たない現在の状況を嘆く語り手の心境と、際立った対照を成している。1895 年と 1903 年に発表された詩を並べてみると、同じ素材でありながら、その基調に違いが認められる。南北戦争での黒人兵士を描く場合でも、ダグラスを回顧する場合でも、ダンバーは初期の段階では人種的平等のために果敢な〈戦い〉を行なった人々への共感を高らかに表明していた。ところが 20 世紀に入ると、戦争で愛する者を喪った悲しみや、指導者の不在を前にしての当惑が前面に出される。ここから、ダンバーが次第に合衆国の在り方についてより悲観的なヴィジョンを抱くようになったことが推察できる。

“When Dey ’Listed Colored Soldiers”、そして詩 “Douglass”が収められた *Lyrics of Love and Laughter* は、その書名が示す温かみを拒むかのように、合衆国、とりわけ南部で横行している黒人への暴力や不正を糾弾する詩を幾つか収録している。この詩集が出版された 1903 年は、W. E. B. Du Bois が *The Souls of Black Folk* を出版したのと同年である。この詩集を、社会抗議的な色合いが特段に強いと規定するのは無理があるかも

しれないが、デュボイスの著作が世に出ることを促した同時代の空気が、確実に流れている。

ところでダンバーは再建期の時代に生まれたが、南北戦争は自分とは無縁な出来事だと思わなかっただろう。黒人たちの兵士としての参戦は、個人的な意味でも馴染み深いトピックだった。1885 年に病死した父 Joshua は元南部の奴隷で、黒人兵士として戦争に参加した過去があったのだ。この父親をモデルにした短編小説が、1900 年出版の作品集に収められた“The Ingrate”であることは、よく知られている。“The Ingrate”は南北戦争とその前夜を背景にしているが、戦後を舞台にしても過去の戦争を想起させる作品がある。それが 1898 年の短編集に収録された“At Shaft 11”である。ここからはこの短編に注目して、〈現在〉を舞台にした作品に組み込まれた〈過去〉の表象を検討する。

この作品の舞台はウェストヴァージニア州にある鉱山である。そこに不当な賃上げをそそのかす扇動者が現れ、口車に乗せられた白人労働者たちはストライキを起こす。それに対して会社側は Sam Bowles 率いる黒人たちを代わりの坑夫として送り込む。白人労働者たちはそんな黒人たちを憎悪し、真夜中に襲撃を試みるが、サムの指揮のもとに黒人たちも食堂に立てこもって応戦する。19 世紀末において、スト破りとして経営側が投入するマイノリティの労働者たちは、敵役として捉えられがちだった。だがこの短編でダンバーは黒人労働者の肩をもち、利欲に目がくらんで労働の義務を放棄してしまう白人労働者たちを批判している。

黒人坑夫らを好意的に描くための工夫として、ダンバーはクライマックスとなる深夜の銃撃戦を描く際、南北戦争時の黒人部隊の活躍を彷彿とさせるイメージやレトリックをちりばめている。身の安全を図るため黒人たちが集結する食堂は、深夜の襲撃が始まると“citadel”「砦」、“garrison”「駐屯地」、“the stronghold”「要塞」といった軍事的な言葉で表現される。銃撃戦の場面では、黒人側がサム・ボウルズの指揮のもと、狙い定めた一斉射撃を行なって白人たちの接近を阻む。そんな彼らの行動は、南北戦争時の黒人兵士たちの振る舞いに類似している。黒人たちの指導者の名が「サム」であることにも意味がある。詩“The Colored Soldiers”で「ハムの子孫」が「アンクル・サム」と結びつけられたのと同様に、白人以上に労働に熱心な黒人たちこそ正当なアメリカ市民として相応しい、という作者のメッセージが登場人物の命名の仕方から読み取れる。“At Shaft 11”で描かれるのは、表層的なレベルでは地方での局所的な紛争である。しかしこの作品では、誰が合衆国に豊かさをもたらしてきたのか、誰がその豊かさを得る権利があるのか、といった問題提起がされている。ダンバーは、戦争時の黒人兵士たちの献身の記憶を読み手に呼び起こしつつ、合衆国の豊かさを黒人が享受することの正当さを読み手に訴えているのである。

この物語は短編集 *Folks from Dixie* の最後から二番目に置かれたが、白人読者の人種偏見に迎合しない先鋭的な作品なので、目立たないよう意図的に配列したのだろう、と推測できる。そうした配慮が必要なほど当時の人種対立が深刻になっていたことは、短編集が出版されて間もなく、ノースカロライナ州ウィルミントンで白人至上主義者たちが多数の黒人市民を虐殺したという事実が証し立てている。この悲劇的な出来事にダンバーは直ちに反応した。彼は地元の新聞に 論説“The Race Question Discussed”を寄稿し、ウィルミントンの悲劇は単に一地方の出来事ではなく、国民全体が共有すべき問題であると主張した。この記事でダンバーは、“fight”「戦う」と“vote”「投票する」、そして“bullets”「銃弾」と “ballots” 「投票用紙」という韻を踏んだ語のセットをつくり、選挙と戦争を重ね合わせる。それによって、健全な民主主義を築く営為から黒人を排除することは、南北戦争で合衆国に多大な貢献をした彼らに対する背信行為だと訴える。ここでのダンバーの考えが、“At Shaft 11”でのメッセージとも通底するのは疑いないところである。

南北戦争は、従軍経験のある元奴隷の父をもつダンバーにとって、重要な歴史的〈記憶〉だった。そのことが彼の作品には詩のみならず、ジャンルを超えて反映されている。南北戦争を背景とする作品において、ダンバーはノスタルジックな感情に埋没することなく、アメリカ黒人の現状を批判的に見据えようとしている。いま現在の問題を取り上げる場合には、アメリカ黒人の歴史的な歩みを振り返りつつ意見表明を行なっている。数のうえでは南北戦争や黒人兵士を直接の素材にしたダンバー作品は多くはない。それでも黒人兵士という人物形象は、この作家の社会や国家に向ける眼差しを知るうえで、鍵となる重要性を持っている。

参考文献

Blount, Marcellus. “The Preacherly Text: African American Poetry and Vernacular Performance.” *PMLA*, vol. 107, no. 3, May 1992, pp.582-93. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/462763.

Dunbar, Paul Laurence. *The Collected Poetry of Paul Laurence Dunbar*. Edited and introduced by Joanne M. Braxton, U of Virginia P, 1993.

---. *The Complete Stories of Paul Laurence Dunbar*. Edited and introduced by Gene Andrew Jarrett and Thomas Lewis Morgan, Ohio UP, 2005.

---. *The Sport of the Gods and Other Essential Writings*. Edited and introduced by Shelley Fisher Fishkin and David Bradley, Modern Library, 2005.

Jarrett, Gene Andrew. *Paul Laurence Dunbar: The Life and Times of a Caged Bird*. Princeton UP, 2022.

Martin, Jay, editor. *A Singer in the Dawn: Reinterpretations of Paul Laurence Dunbar*. Dodd, Mead, 1975.

Terry, Jennifer. “‘When Dey 'Listed Colored Soldiers’: Paul Laurence Dunbar's Poetic Engagement with the Civil War, Masculinity, and Violence.” *African American Review*, vol.41, no. 2, summer 2007, pp.269-75. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/400270.